
義妹と忠犬引き連れて転生したので、好き勝手に楽しむ！

メア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義妹と忠犬引き連れて転生したので、好き勝手に楽しむ！

【Nコード】

N4496BA

【作者名】

メア

【あらすじ】

神様に殺された変態がデジモンアドベンチャーの世界で好き勝手します。

ご都合主義と反則能力多数です。

後、微太一アンチ（ヒカリについてだけ）

かなりの変態です。ヒカリちゃんにペロペロする為に命を賭けるくらい。

プロローグ

此処は何処だろ？ 確か、神羅フロンティアをやりながら、デジモンアドベンチャー01を見て、この神作最高！ ヒカリちゃんをペロペロしてえとか思ってたんだが……………何がどうなったんだ？

「貴様はパソコンから突如放電し、脳死した。その後、ドナー登録されていたおまえの身体は様々な人の役にたった」

「なんだってえっ！？ まだ、色々やりたい事があったのに！」

「（脳死の部分しか聴こえて無いんだろうな）まあ、天罰だ。諦めろ」

「嫌だ！ テンプレートな展開を希望する！ 神様助けて！」

「報告ではこちらのミスもあるが……………」

あれ、本当に神様？ 姿はなぜかゼノン様だけど。

「何それ？」

「うむ、部下が“コイツキモい死んじゃえ”と言って作業していたら……………それをたまたま聴いた死を司る部署の奴がその言葉を正しいと思う、それをそのまま受理してしまったのだ」

なんだってえっ!?

「しかも、隠蔽する不始末まで起こしたのだ。気付いたのは、お前の心臓によって命が救われ、定めを超えて生きた少女のお陰だ。その少女はお前を思い、世界史に残るような偉業を成し遂げ、数々の人々を救った」

「役に立っただんな」

「ああ。それでだ、役に立っただんなからもう良いだろう？」

「そうだな。もう良いや」

End

「んな訳あるかつ！ 確かに役に立ったかもシレネエが、俺は満足してねえっ！」

「ちっ、上手く誤魔化せたかもしれなかったが……………駄目か。」

「ゼノン様の格好をしてる癖に……………」

「これは貴様の心がそう見せているだけだ。まあ、テンプレートではあるが転生させてやる。貴様には少女が救った死ぬはずだった人間の分も含んでかなり改竄させてやる。何がいい？」

「努力すれば全てが無尽蔵上がって行く程度の能力。あつ、不運とかはいらないから。後、行く世界は？」

「うむ、デジモンアドベンチャーにしてやろう。我に感謝せよ」

「ありがとう神様！ それじゃデジヴァイスだけど……………」

「デジヴァイスは初期の形で、D3、ディーアーク、デジヴァイスIC、クロスローダーの機能を入れておいてやる、サービスで武装などのカードは付けておこう」

無いと意味ないしな。

「パートナーデジモンは何体まで行ける？」

「クロスローダーの機能があるのだ、好きにしろ。何なら、オリジナルでも構わん」

「なら、一匹目はムジナ」

「待て、神羅万象フロンティアか？」

「うん。ムジナ、黒刀ムジナ、黒刀斬姫ムジナって感じ？」

「完全体はあっちか、良からう。ただし、我はフロンティアしか知らぬから性格は保障せぬぞ」

よし、後一体欲しいな。

「後一体は特殊なのがいいな〜」

「なら、無限に成長する竜はどうだ？」

「何？」

「ウロボロス」

「ちよつ、是非可愛い女の子をお願いします」

「任せろ。どちらも、デジモンを殺し、そのデータを吸収する事で力を増す様にしておく」

「後は……………紋章かな？」

「なら、闇の紋章と吸収の紋章で良からう。闇はその通り、吸収は他人の紋章の力を得る。まあ、粘膜摂取か血を飲むぐらいだな」

「じゃあ、デジメモリも付けといてくれ」

「分かった。転生場所は八神家の近くにしてやる」

「ども」

そして、テンプレート通りに落とされた。



「まだ余っておるな……………」

「あの、すみません」

「どうした？」

「例の女の子が、あのゲスに御礼するって聴かなくて……………」

「なら、ソイツも転生させてやれ、どうせ余っているんだから構わ
ん」

「了解しました」



俺が月島コウヤに転生してから三年が立った。その間にやった事は勉強だ。それも特に医学について学び、薬を開発するまでになった。特典の力は化け物だ。

「マスター、お勉強の時間です」

俺に話し掛けて来たのはウロボロモンのエセルドレーダのちっこい掌サイズ犬耳版。つまり、そういう事だ。

「じゃあお願い」

「はい」

知識はかなりあるので、家庭教師になって貰っている。

「ご飯よ〜」

両親の呼び声を聴いて、勉強を止めた。それから、エセルドレーダをデジヴァイスの中に戻してリビングに向かう。

リビングには母さんと同い年の義妹がいた。

「ほら、しっかり手を洗うのよ」

「は〜い」

義妹の奏はお母さんを手伝って、橋とかを食卓に運んでいる。

「相変わらず、二人は賢いわね」

手を洗ってから、俺も一緒に手伝って準備する。

「「「頂きます」」」

ご飯を食べながら考えるけど、やっぱりお父さんは仕事が忙しいみたいだ。

「お母さんは仕事してるから、早く寝なさいね」

「「はい（はい）」」

ご飯を食べ終えたら、可愛い義妹と遊ぶ……………抱き合って夜空をベランダから見上げるのが日課だ。

「お兄ちゃん、あれ」

「今日がそうなんだ。ちょっと行ってくる」

「私も行く」

「分かった」

二人で急いで着替え、こっそり外に出た。

空にはデジタルゲートが開いていて、綺麗な光景になっている。

「恐竜？」

「グレイモンとパロットモンだな。丁度いい、エセルドレーダ行つてこい……………カードスラッシュ天狼星の弓」

黄金に輝く弓を装備させて、俺はデジモンの足元へ行く。

「何だお前は！」

「うるさい、どけ！」

太一をどけて、ヒカリちゃんを見ると熱が凄い。

「ちっ、薬はあっても水が無いな」

だから、ヒカリちゃんを抱き上げて、薬を自分の口に入れて、口移しで直接ヒカリちゃんの口に入れた。

「んんっ!？」

唾液を流し込んで、無理矢理飲ませる。

「お前っ!？」

「お兄ちゃんの邪魔はさせない」

「くっ、離せ！」

太一は奏に任せておけば大丈夫だな。
それから、ヒカリちゃんの口を堪能しつつ薬を飲ませた。

「あっ、あっちも終わったかも」

「んん」

ぼくとしているヒカリちゃんと空を見るとボロボロになったグレイモンとパロットモンに向かった大量の光輝く矢が二匹のデジモンを次々と串刺しにして殺した。そして、そのデータが全てエセルドレーダに吸収された。

「これでヒカリちゃんは大丈夫だな」

「お前、ヒカリに何を飲ました！」

取り敢えず、上着を脱いでヒカリちゃんに着せた。

「葉だ馬鹿野郎！ 二人を連れて行くぞ」

俺はヒカリちゃんを抱っこして八神家に連れていった。

「うん」

「あれ、太一は？」

「気絶させた」

「さすが半分……いや、いい」

そのまま奏は太一を連れて来た。

それから、二人を家の前まで送って、ヒカリちゃんに葉を渡して別れた。

「お兄ちゃん、お風呂に入ろう」

「ああ」

三歳なのに、やってる事は違うよな。まあ、お風呂は小さな子供用だけだな。

そして、お風呂からあがったら二人で一緒に寝て、起きたら勉強だ。

更に月日が流れて、俺の生活は朝練、朝食、勉強、昼食、訓練、遊び、おやつ、遊び、研究、開発、夕食、散歩、お風呂、勉強、就寝という生活を続けている。そして、お台場に引越した。

「おはよう、ヒカリちゃん」

「うん／＼／」

「おはようヒカリちゃん」

「おはよう奏ちゃん、コウ君」

学校ではヒカリちゃんとも仲が良いが、太一がマジで邪魔だ。太一とは喧嘩ばかりしている。

授業が終わって放課後になると、太一と喧嘩するんだけど、どうしても負けてしまうからヒカリに近づけ無い。
しかも、クラスが違うからマジで接点が無くなる。

「マジ、太一邪魔……………」

「また太るよお兄ちゃん」

いらつくから勉強しながら、お菓子を食べてたら太り出した。

「だってさ、強くなりすぎて、本気でやったら怪我させて、ヒカリちゃんを悲しませてしまうから駄目だしな」

「まあ、別にいいけど……………」

そんな生活をしていると、七月三十一日になった。

初めてのデジタルワールド

今日は七月三十一日、明日は運命の日、町内会キャンプの日だ。
という訳で、太一を出し抜いてヒカリちゃんの家にお邪魔しました。

「診察に来たよ、ヒカリちゃん」

「うん。よろしくお願いします／＼」

医学方面に頑張ったら、新薬とか開発しまくったから博士号と医師免許がアメリカで取れたから、ヒカリちゃんの診断を合法でしている。

「んじゃ、服脱いで」

「うん／＼」

服を上げて貰って、心音などを聴いてカルテに書き込んで行く。ぶつちやけちよつとエッチなお医者さんごっこだ。

「ちょっと風邪気味だけど、この薬を飲んであつたくして寝てくれればいいよ」

「うん、ありがとうコウ君／＼」

「そういえば、明日の買い物終わった？」

「今から行こうと思ってる。一緒にいかないかな?／＼／」

「いいよ。ついでに色々買って行こうか」

「うん♪」

それからヒカリちゃんとお出かけた。

タクシーを呼んで、買い物に出かけた。発進する時、帰ってきた太一が何か叫んでたが無視した。

「ねえねえ、似合うかな?」

「うん、いい感じ。こっちのワンピースもいい感じだ」

今はブティックに来て、ヒカリちゃんの服を選んでいる。

「奏も似合いそうだし、ペアルックにしてみたらいいよ」

「確かにいい感じ……でも、お小遣いが足りないよ……」

「いいよ、プレゼントするし、奏と一緒に着た姿を見せたいから」

「いいの?」

「お金に不自由はしてないしね。じゃ、会計してくるね」

「うん」

ヒカリちゃんが持っていた服とワンピース二着を購入して、アウトドアショップに向かう。

「あははは、これおっきい！」

「何人で寝れるんだろ」

寝袋や様々なサバイバル用品を購入してデジヴァイスに仕舞った。
このデジヴァイス、アイテムボックス機能まで付いていて、かなり便利だ。

「何でそんなに買ってるの？」

「もしものため？」

「起こるの？」

「異常気象が続いているからね」

本当は現実にはサバイバルが必要になるんだけどね。

「じゃあ、次どこに行く？」

「うーん、必要な物は揃ったし………エセルちゃんは何かない？」

ヒカリちゃんはデジモンについても覚えているし、エセルドレーダの事も教えてある。

「私はマスターに従いますが……………」

「良いよ试试看？」

「あれが食べたいです」

エセルドレーダが指差したのはクレープ屋さんだ。

「おいしそう」

「じゃ、決まりだ」

そう言った瞬間、エセルドレーダは犬耳としっぽをパタパタと嬉しそうに振りだした。

「行こう、ヒカリちゃん」

「うん♪」

手を握って連れていき、クレープ屋さんに並びながら、注文を決める。

「まだかかるね」

「暇だから遊ぼうか」

「歌が良いかな……………駄目？」

「無問題」

そして、俺は太った身体に似合わない歌声を披露する。全てデジモンアドベンチャーの曲で、声は歌手そのもの。練習したら出来るようになった。

「凄いね！」

回りからも拍手が貰えたが、恥ずかしいぞこれ。

「注文どうぞ、さっきの御礼にサービスしてあげる」

「じゃあ、おっきい生地にトッピング全部を一個だけ」

「はいよ」

ちょっと高かったが、三人で交代しながら完食した。

「あっ、クリーム付いてる」

「あう／＼／」

口元に付いていたクリームを取って、食べるとかなり恥ずかしがった。可愛い。

「コウ君こそ……………」

「／＼／」

仕返しされて、結局二人で照れた。
それから、水族館へ行ってから俺の家に帰った。

今日はヒカリちゃんも泊まっていく事になったからだ。

「奏、ただいま」

「お邪魔します」

ちなみに、明日の準備はヒカリちゃんのも含めて全て此処にある。

「いらっしゃいヒカリちゃん。ゆっくりしていつてね」

「はい、お邪魔します」

母さんも含んで、四人で食事をして三人十一匹でお風呂に入った。
ヒカリちゃんはかなり恥ずかしがったが思いっきり手洗いしてあげた。逆に奏は洗ってくれた。

「お休み」

「「お休みなさい」」

そして、川の字で寝た。

次の日、着替えてからヒカリちゃんと奏を診察した後、朝食を取りながら報告した。

「ヒカリちゃんは少し熱っぽいけど、大丈夫だな。奏は健康体だね」

「それじゃ、キャンプに行ける？」

「問題無いよ。ただ、色々気をつけなくちゃいけないけど………」
「どうする？」

「いきます」

「なら、一緒にいるよ」

ヒカリちゃんは身体が弱い部分があるからね。

「準備出来たよ」

「それじゃ、行こうか」

「うん」

それから、準備して集合場所に向かった。

集合場所では太一達選ばれし子供やが待っていた。

「お兄ちゃん、おはよう」

「ヒカリ、大丈夫だったか？」

「大丈夫だよお兄ちゃん。心配しすぎだよ」

「いや、そっちの意味じゃねえが……………」

太一の相手はヒカリに任せよう。

「先生、来ました」

「月島コウキと月島奏、八神ヒカリだな。それじゃ、お前達は同じ班だ。支給品は確認しておいてくれ」

「分かりました」

それから、太一達とは別のバスに乗ってキャンプ場に向かった。

そして、キャンプ場に着いたら、ヒカリちゃんと奏と一緒にテントを用意してその中にいる。

「暇だな」

「確かに暇」

奏はパソコンで何かしている。ヒカリちゃんはデジヴァイスに興味ぶかそうに見ている。

「うん」

「何か無いかな？」

適当にデジヴァイスを弄っていると、デジヴァイスがすっぽ抜けて奏の弄っているパソコンの画面に………あつ、デジタルゲートが開いた。しかも、吸引力強すぎ！

「くっ」

「きゃあっ!？」

「ちっ」

奏も吸い込まれたけど、奏は特殊なので大丈夫だろうから、ヒカリちゃんを抱き寄せて守りながらデジタルゲートを潜った。

「ごちゃごちゃした意味の解らない空間を通過して着いたのはファイル島みたいだ。」

「ヒカリちゃんも無事だし、デジヴァイスのシステムも問題無いから………」

この時点でヒカリちゃんが此処にしていると原作ブレイクだな。まあ、

こっちは裏で進むか。

「問題ある」

「えっと……………奏か？」

姿が銀髪の天使ちゃんから狸耳が生えたムジナ……………ムジナモンの姿になっていた。

「半分デジモンだったからそっちになったんじゃないか？ 何か問題はある？」

「問題は元の姿戻れなくなった」

「まあ、面白がった神様のせいなんだろうがな。それにフロンティアでデジモンになってたから同じ感じかな？」

「解らないけど、お兄ちゃんを守る力を頼んだらこうなったから」

「んん……………ここは……………」

ヒカリちゃんが眼を覚ましたみたいだ。

「起きた？ ちなみに、ここはデジタルワールドで現在帰る方法は解らない」

「そんな……………」

「大丈夫。俺がヒカリちゃんをどんなことをしても守るから」

「ありがとう……………あれ、奏ちゃんは？　それに、このデジモンさんは？」

まあ、普通はそうだよな。

「この子はムジナモン。そして、奏でもある」

「私は半分デジモンだから」

「そうなんだ……………じゃあ、これからはムジナちゃんって呼ぶね」

「うん」

流石ヒカリちゃん。デジモン関係の順応性が半端無い。いや、普通にデジモンの話とか色々してたけどね。

「それじゃ、探索しようか。ヒカリちゃん、立てる？」

「うん。大丈夫だよありがとう」

ヒカリちゃんの手を取って起こし、そのまま手を繋いで移動する。やっぱり最初は森の中だ。

「取り敢えず、水場をさえ有れば一ヶ月は持つから、ムジナは上から探して」

「うん」

ムジナはジャンプして木の上に登って、水場を探してくれる。

「あつ、私のバックだ」

「俺達のもあるな」

回収しておこう。

「ヒカリちゃん、普段歩くときに必要の無い奴はこっちで預かるよ」

「ありがとう」

バックを預かって、アイテムボックスに入れておいた。ヒカリちゃんもポーチに入るだけで充分みたいだし。

「歩くの辛くなったら言ってね。オンブだって出来るし」

「うん、大丈夫」

ヒカリちゃんは溜め込むから、気をつけなくちゃな。

それからしばらくして、大きな泉の辺まで来た。

「ここで今日は休もう」

「だ、大丈夫………だよ？」

「駄目。それに俺も疲れたからね。ほら、木陰で休む」

ヒカリちゃんを木陰に座らせた後、泉の周りを調べる。

「水嵩の増加は大丈夫。水質は……………沸かせば平気だな」

水質調査などの機能をデジヴァイスに追加して正解だったな。
次にく過機を取り出して水を綺麗にする。

そんな事していると、水から竜が現れていきなり攻撃を仕掛けて来た。

「シードラモンか……………」

シードラモンの攻撃……………水のブレスをバックステップで避けて、指示を出す。

「ムジナは前衛を頼む」

「うん」

懐からカードを取り出して、攻撃プログラムを選択する。

「攻撃プログラムA、カードスラッシュ！」

カードを読ませると同時にムジナの中にデータが入り込んで、ムジナを強化した。

「リロード、エセルドレーダ！」

「マスターのお望みのままに」

「カードスラッシュ、天狼星の弓！ エセルドレーダはムジナの援護を頼む」

「イエス、マスター」

シードラモンの顎にムジナが蹴りを入れて浮かした所に、エセルドレーダの矢が次々と突き刺さり、データへと還元される。

「反応はまだ沢山いるぞ!」

「ぐっ!」

出て来たシードラモン達によって、不意打ちを喰らったムジナは吹っ飛ばされてヒカリちゃんの近くにある木に激突した。

「大丈夫!?!」

「痛いけど問題は無い」

こいつら………よくもムジナを………許さない!

「ぶっ殺す!」

「んっ、なんか気持ちいい」

デジヴァイスが光って、ムジナとエセルドレーダを黒い光りが包み込み、黒い光りが無くなり、中から現れたのは少し成長して黒刀を持ったムジナと同じく成長（人間サイズ）して天狼星の弓を持ったエセルドレーダだった。

「憎しみで進化した?」

「カッコイイ………」

「うん、進化した………それじゃ、斬る」

「マスターの為に、全部落とす」

先程より速くなったムジナは、接近した瞬間、ジャンプして的確にシードラモンの首を一閃して叩き落とした。エセルドレーダは次々とシードラモンの両目を射ぬ射て脳を破壊し殺していく。

「こっちも派手に行くぞ！ デジメモリ、ガルルモンフォックスフアイヤー！」

SDカードの様なデジメモリをデジヴァイスに挿入すると、半透明なガルルモンが出て来て、シードラモンに必殺技を放ち、消えて行った。

そして、二十分後には大量にいたシードラモンは全てデータとなり、ムジナとエセルドレーダに吸収された。

怪我の確認等をしてようやく落ち着いたので、次の作業に入る。
まず、デジヴァイスのアイテムボックスからテントに折りたたみ机、ガスコンロなどを取り出して設置して行く。

「凄い」

「いつも入れっぱなしだけだな」

「手伝うね」

「お願い」

皆で準備したら、鍋にろ過した水を入れて沸騰させる。そして、アイテムボックスに大量に入っているインスタント食品………どん兵衛を取り出し、湯を入れる。五分後、美味しいうどんが食べられた。流石、非常食。

後、ろ過した水を沸騰させて冷やしてからペットボトルに入れて飲み水にした。

ヒカリゲット（前書き）

かなりご都合的になっています。

ヒカリゲツト

Side ヒカリ

デジタルワールドに迷い込んでから三日、私とコウ君はこの島の中を歩いているの。

「大丈夫？」

「はぁ、はぁ……………大丈夫だよ……………」

この島に来てから私は足手まといになっている。デジモンもいないし、大量も無い……………何か役に立ちたい。

「コウ君の方こそ怪我は大丈夫？」

「これくらい平気だよ」

「よかった」

「あれはヒカリちゃんのせいじゃないから」

コウ君はダークティラノモンに襲われた時、私を庇って何度も攻撃を受けて怪我をしたの。

「何とか撃退出来たし、大丈夫だよ」

「うん……………」

本当は大丈夫じゃないのは分かってる。ムジナちゃんもエセルちゃんもデジヴァイスの中で休息を取らないといけないほど弱ってるから……………私に出来る事、何か無いかな？

「ちっ、さっきの奴等か……………」

「っ!？」

木々を破壊して出て来たのは、黒いティラノザウルス……………ダークティラノモンが三体……………恐くて身体が震えて動かない……………また迷惑かけちゃう……………どうしよう。

「手詰まり……………仕方ない、虎の子を切るか……………デジメモリ、ホーリーエンジェモン……………ヘブンスゲート」

半透明なホーリーエンジェモンが現れて、ダークティラノモンを門から降り注ぐ光の柱で倒してくれました。

「使えるデジメモリもこれで、弱い奴しか無いな。それより、ここはファイル島じゃないのか？」

「はあ、はあ……………」

何だろ、身体が重くて苦しい。

「ヒカリちゃん!？」　くそ、何処か休める場所は……………」

コウ君の慌てた声を聞きながら私の目の前は霞んで行き、何も見えなくなった。

守られているような何か、暖かい温もりを身体全体で感じていると、何か身体を這う様な気持ち悪い感じがして薄く眼をあけると、目の前にはコウ君の顔があった。どうやら、コウ君に顔を舐められていたみたい。

「何してるの？」

「あ、気が付いた？」

「うん……………っ／／／」

意識がハッキリした私は、自分が寝袋の中でコウ君と裸で抱き合っていて、コウ君の手が私のお尻や背中を触っていて、お腹に変な感触がある。

「ヒカリちゃんが倒れたから、急いでこの洞窟を見付けて中に入って看病してたんだけど、ウイルスに侵されたみたいで、普通の薬じゃ効かないから、免疫力を高める薬を投与して、暖める為に裸で抱き合ってたんだ」

「よくわからいけど、舐める理由は無いよね？」

「それは……………俺がヒカリちゃんの事が好きで、可愛い寝顔を見てたら我慢出来なくなったから……………後悔はしてないけど、ごめん」

「あう／＼／」

私はコウ君の事……………嫌いでは無いけど、良く判らない。

「ごめんなさい。まだ、良く判らないの」

「そっか」

落ち込んだ顔……………やだな……………あれ、これなら私も役に立つ？

「でも、嫌いじゃないから」

「ありがとう」

頭を撫でてくれる感触は気持ちいいし、暖かくなるの。

「あの、私の身体……………コウ君がしたいなら……………舐めて良いよ」

「マジで！」

恐いくらい眼がギラギラしてる……………鳥肌が……………我慢しなきゃ。

「うん。私、足手まといだからコウ君の役に立ちたいの。コウ君が満足するなら、私の身体……………恥ずかしいけど好きにしていいいよ」

／／／

「好きな女の子を守ってるだけだから、別に足手まといとか思っていないよ。でも、本当にいいの？ 絶対、一度やったら止まらないよ？」

「……………お願いします……………あう／／／」

それから、優しくキスをされて、口の中や身体全体を余す所無く舐められた。最後に頭を撫でてくれて、喜んでる顔を見ると気持ち悪い感じにも耐えられた。

四日後、デジタルワールドに来てから一週間、私の身体の体調は安定してきた。まだ、注意は必要みたいだけど、新しく調合した薬を飲んでからは大分楽になった。それに、毎日数回に渡って身体を舐められて慣れたのか、気持ち悪いのが気持ち良く感じるようになってきました。

「はい、今日の薬……………んっ」

「んんっ、ちゅっ、んぐっ」

毎日口移しでお薬を貰っているので、キスも好きになりました。それに、求めてくれているから役に立っている事が分かって私も嬉しいです。

「またやってる」

「お帰り、ムジナ」

「お帰りなさい／＼／」

「ただいま。食料取って来たから……………」

私達はこの洞窟で生活を続けています。ムジナちゃんが食料や薬草を取ってきてくれて、コウ君とエセルちゃんが調合してくれています。

「マスター、この洞窟を拠点にしてこの場所を詳しく調べるといいと思います」

「そうだな。何だか、ここはファイル島じゃない気がする」

「それに、どうせならここで修業して行きたい」

「それでいいな」

エセルちゃんは省エネと言って、小さいままで、食事しながら会話しています。

「私も手伝える事ある？」

「安静にしている」

「むー」

コウ君の相手だけじゃ無く、もっと役に立ちたいんだけど……………駄目なのかな？

「勘ねないで……………じゃあ、料理を教えてあげるから」

「うん♪」

「じゃあ、ベットでも作ってみるか」

作れるのかな？

「お風呂が欲しい」

「お風呂か……………少し考える」

「「お願いします」」

私とムジナちゃんの声は一緒になった。一番の友達だから、同じ考えだと思おうと嬉しい。

私は寝袋の中から隣で作業しているコウ君を見詰めている。

コウ君は、ムジナちゃんが持って来た木を使ってベットを作ろうとしています。

「皮は剥いだし、ムジナから借りた刀で四角形に切り取って……………」

コウ君は角材を次々と作っていきます。その角材は作れば作るほど上手くなっていきます。作業に没頭する姿はなんだかカッコイイです。

「釘なんか無いし、挿入形式でやるか………ところで、暇じゃ無い？」

「暇じゃ無いよ。見てるだけでも楽しいよ」

「そうか………ならいいや」

「んっ」

頭を撫でられると気持ち良くて眠くなって来ちゃう。

「さて、続きだな」

「頑張って」

「おう」

角材の一部をくり抜いて、合わせて組み立てて行くと、グラグラするベットが出来ました。

「やり直し」

何度かやり直して、ちゃんとしたベットが出来ました。ベットの上には大きな葉っぱとキャンプ用のマットに寝袋を開いた状態で敷いて、その上にシーツを被せ、毛布と布団を用意して完成となりました。

「凄いね。ちゃんとしたベットになってる」

「うん、我ながら頑張った」

「しかし、マスター……………汚し過ぎです」

「あははは」

木片などは燃やしたらいいけど、ベットの失敗した物はどうするんだろう。

「なら、扉にするか」

「え？」

コウ君は残った角材も使って、洞窟の入口に扉を作ってカモフラージュまで施してしまいました。

「やばっ、楽しくなって来た」

「あははは」

その日の夕方には洞窟の中も補強されて、天井、地面、壁を全て木の板に変えてしまいました。

「凄く快適になったな」

「うん。やり過ぎな感じもするけど……………」

「流石マスターです。明日はお風呂ですね」

「確かにそうだ」

そして、次の日には近くの河原にお風呂が出来ました。木と石で出来た場所に川の水を流し込んで、焼いた石で水をあつためる簡単なお風呂だけがあると無いとでは全然違います。

皆でお風呂に入った後、私は何時もの通り裸でコウ君に身体を任せました。

「ヒカリちゃん、そろそろ次に行こうか……………」

「？ 私はコウ君に全て任せます」

「そう、ならヒカリちゃんの全部を貰うよ」

「どうぞ？」

意味が解らない私はそのまま身を委ねて、コウ君の物が私の中に入ってきた時、余りの痛さで泣き叫んだのですが、コウ君は止めてくれなくて、私の中に何かを出していきました。

「ごめん、止まらなかった」

「寝るまで、頭を優しく撫でてキスしてくれたら許します」

「ありがとう。愛してるよヒカリ」

そして、その日から私の生活はまた変わりました。痛み慣れるまで何度もされてはキスをされながら頭を撫でられる……………そして、だんだん真っ白になって行く頭の中で大好きや愛してるの言葉が私

の中で大きな割合を占めて、コウ君の存在がどんどん大きくなっていきました。

「あのね、ムジナちゃんから聞いたんだけど………コウ君、ちゃんと責任取ってくれる？」

ちゃんと教えて貰ったら、事の重大性を理解出来たからコウ君に尋ねてみた。

「勿論だよヒカリちゃん」

「私とムジナちゃんをお嫁さんにしてくれる？」

「うん。俺も二人が大好きだし当然………え？」

驚いた顔をした。少し嬉しいな。

「ヒカリちゃんはそれでいいの？」

「うん。ムジナちゃんともしてるの知ってるし、親友同士、ずっといられるから………あつ、エセルちゃんもだね」

「まあ、ヒカリちゃんがそれで良いなら良いや。大好きだよヒカリちゃん」

「私も大好き」

前から私の為に色々してくれていたけど、身体を重ねるうちに気が付いたら大好きになっていた。

「じゃあ、寝ようか」

「お休みなさい」

最後にキスして、私は暖かい温もりに包まれて眠りに着いた。

次の日、朝起きてキスしていると、扉を突き破って何かが私の手元にやって来た。

「これはデジヴァイス？」

「ヒカリちゃんのデジヴァイスみたいだね」

「でも、デジモンがないね」

「いずれ巡り会うよ。その間はエセルドレーダ達を自分のデジモン……仲間として一緒に入ればいいよ」

「うん♪」

未来の為に大好きなコウ君やムジナちゃんにエセルちゃんと一生懸命生きなきゃ。

S
i
d
e
O
u
t

ヒカリゲツト（後書き）

原作介入はファイル島からか、サ―バー大陸か、ヴァンデモンまで隠れるか分かりません

原作開始（前書き）

ちなみに奏はそのまま天使ちゃんの姿です。今はムジナ状態ですが。

原作開始

Side 太一

キャンプ場で俺はテントを張り終えた俺はヒカリの元に向かった。
なぜなら、ヒカリを変な眼で見ている変態野郎と一緒に班だからだ。
変態野郎の妹はかなり可愛いんだが、なぜか変態野郎に心酔してる
んだよな。

「ヒカリ、いるか？」

中を覗くと、完全にもぬけの殻だった。

「なんだこれ……………」

そう、ヒカリの荷物も至急されたはずの道具も、テントの袋 何一つ無かった。いや、壊れたパソコンのおさま出て部品だけはあった。

「何かがおかしい……………」

「太一、どうした？」

「ヤマト……………実はヒカリがいるはずなんだが……………」

「あるはずの物も何も無いな……………」

ヤマトに事情を話していると、空まで来たので、空にも話して手伝って貰う事になった。

「一通り探したら、階段の先にある小屋に集合ね」

「悪いが頼む」

「任せろ（て）」

それから、別れて話しを聞いたりしたが、三人がテントから出たと言う情報は無かった。

情報が無いまま小屋に行くと、空とヤマトが待っていた。ヤマトの隣にはヒカリと同じくらいの男の子がいた。

「太一、そっちはどうだった？」

「ダメだ。全然情報がねえ！」

小屋の柱を殴りつけたが、苛立ちはおさまらねえ。

「ヤマトは？」

「テントに入ったのを見た奴はいたが、出て行ったところを見た奴はいなかった」

「ここは先生に事情を話して協力して貰った方が……………」

「そうだな……………なんだこれ……………雪か？」

空か白い物が沢山降ってきた。

「いっぱい降って来るよ！」

「風も強くなってきたぞ！」

「皆、小屋に入れ！」

そして、俺達は小屋に入って吹雪が過ぎ去るのを待った。

待ってる間に次々と人が来て、七人になった。どうせならと、自己紹介をして待った。

「止んだみたいだな」

扉を開けると、白銀の世界が広がっていた。

「ねえ、あれを見て！」

「綺麗……………」

「オーロラだ！ 僕、初めてみたよ！」

「凄い……………」

「日本で見られるはずが無いのに……………」

オーロラを見ていると、空から何かが落ちてきた。

「逃げろ！」

皆が逃げようとしたが、落ちて来る物の方が早かったが、何とかみんな無事だった。

「これはなんだ？」

「浮いてる……………」

光って浮いてる変な機会を見ると、津波がいきなり俺達を襲い、飲み込んだ。

S i d e O u t

ヒカリちゃん……………ヒカリと結ばれた次の日、ヒカリのデジヴァイスが届いた。つまり、太一達の元にもデジヴァイスが届いた事になる。

「さて、どうするか……………」

「マスター、ジャミングを行いヒカリのデジヴァイスの反応を消してしまいましょう」

「確かにその方がいいか」

「後、マスターがヒカリと繋がった事により、ヒカリの持っている光の紋章と相性のいい特性が吸収されました。だから、しばらくは光の紋章がヒカリに反応する事は無いと思います」

吸収の紋章ってデータドレインだけじゃなくて、そっちも出来るんだ。いや、どっちも変わらないか。

「それじゃ、ジャミングを使うか。エセルドレーダ、任せる」

「お任せください」

これでヒカリの安全はある程度大丈夫だな。いつヴァンデモンが襲って来るかわからないからな。

「ヒカリ」

「どうしたの？」

調理をしているヒカリに声をかけた。

「デジヴァイスを改造するから貸してくれない？」

「はい、どうぞ」

「ありがとう。ご飯、楽しみにしてるね」

「頑張って美味しいの作るね♪」

満面の笑顔を見せられると、つつい頭を撫でてしまう。そして、撫でられて気持ち良さそうにしているヒカリを見ると、その感触もあり、無限ループに入ってしまう。

「マスター？」

「はっ！？ それじゃ、向こうで作業してるね」

「うん。いってらっしゃい」

少し残念そうなヒカリから断腸の思いで離れて、エセルドレーダと共にデジヴァイスを改造する。道具自体はアイテムボックスに入ってるからね。とりあえず、発信機と盗聴器、デジメモリ、ジャミング装置を組み込んでおこう。ついでにプレゼントも作るか。

S i d e ムジナ（奏）

ヒカリが墜ちた。その手段が調教と暗示というのダメだと思うけど、お兄ちゃんの為なら仕方ない。

だから、エセルドレーダが薬の副作用に媚薬成分が入っていたり、混入されてたりしても、私は親友のヒカリよりお兄ちゃんを優先したから見逃した。

ごめんねヒカリ。でも、私の今回の人生は全てお兄ちゃんに捧げると決めたし、そうなるようにして貰った。だから、お兄ちゃんを守る為にも半分デジモンになってもいる……………そして、その力もデータードレインという形で手に入れている。

「たっ、助け……………」

首に巻いた赤いスカーフと腹部のスマイリーフェイスマークがあり、小悪魔の様な姿をしたインプモンを黒刀で一閃。二つに両断して殺し、データへと変換して私の身体へと吸収した。

「ひでえ……………俺達は何をしたって言うんだっ!？」

「私達に悪戯しようとしていた」

「ちょっとしたお茶目じゃねえかっ!？」

周りにいたインプモン達が一斉に騒ぎ出した。

「うるさい。黙って私の糧となれ」

「くそっ、やっちゃまえっ！」

「無駄な足掻き……………」

「黙れっ！」

「「ナイト・オブ・ファイヤー！」」

大量に放たれたインプモンの必殺技である黒い炎を、最小限の移動で避けて接近し、次々と黒刀を閃かせてインプモンをデータに変えて行く。

「ちくしょう！」

「ここは俺達の巣だぞっ！」

そう、ここはこの島（？）にある山の洞窟……………私の目的のもう一つは害虫掃除。

「数はいるんだ、連続して攻撃しろ！」

「「ナイト・オブ・ブリザード！」」」

今度は冷たいのか……………面倒。

「斬る」

ブリザードの現象その物を切断して無効化する。

「馬鹿な！」

動揺している間に、インプモンの間をすり抜けて黒刀を仕舞う。

「なっ、なんだ？」

「切られてやが……………」

数十体が全てデータになって私に吸収された。

「私に理解出来る物は全て斬れる……………でも、難しい」

デジモンを殺してデータを吸収すれば、そのデジモンの身体や技などは理解出来る。逆にデータを吸収しないと難しい。その対策としてデータドレインが使えるんだけど。データドレインだと問答無用で敵のデータが手に入るし、強化が出来るけど、副作用があるみたいだから多用は出来ない。

「進もう」

進んでいくと、インプモンのデジタマがある部屋を見付けたから殺して先に進む。

進み続けると頂上付近に出た。

「少し休憩……………」

黒刀ムジナモン（奏）

属性…無し

世代…成長期

種族…タヌキ（人間）

L v 8

HP 725

攻 432

防 432

速 132

ステータスを見ると、レベルが上がっている。こんなのを見ると人間じゃないって解る。しかも、お兄ちゃんが言うには、このデータはデジモンじゃなく神羅万象フロンティアのデータみたい。

「よし、行く」

歩いて山頂に登って行くと、お花畑に出た。

「綺麗……………」

羽が羽ばたく音がして、空をみ上げるとクワガタの様な大きな虫が飛んできた。

「っ」

いきなり急降下して襲い掛かって来たので、ジャンプして空中に逃れた。そして、さっきまで私がいた場所にクワガタモドキの大きな顎が出現し、激しい金属音が響いた。

「問答無用なら、こっちも容赦しない」

空中で身体を捻り着地し、着地と同時に接近し切り掛かる。

「硬い……………」

流石に大顎は無理。

「ガッ！」

また突っ込んで来たクワガタモドキの下にスライディングで潜り込んで大顎を回避して、お腹に黒刀を差し込んで切り裂いて行く。背中が痛いけど我慢。

「ギャアアアッ！」

「後、少し？」

「殺す殺す殺す殺す殺す」

「何か嫌な予感がする……………」

クワガタモドキがデジタルコードと光に包まれて組み変わって行った。

「進化した……………」

更に巨大化して、私の何倍もあるし感じるプレッシャーも凄い。

「っ、何これ」

羽ばたき音を聞いていると私の中にある破壊の衝動を呼び起こすのが解る。そして、戦っていると、だんだんとただ目の前の敵を殺す

事に集中していく。

「殺す……………」

中れば即死の攻撃を紙一重で避け続け、因果応報……………必殺技のカウンターを放って攻撃していくが、ダメージが少ししか入らない。早く壊したい……………使う。

「データドレイン……………」

後ろにジャンプして距離を取り、黒刀を持っていない方の手を翳し、腕輪を起動し、腕輪からデジタルコードで出来た砲身をアイツに向けて吸収と改変のコードで出来た黒い光の塊を巨大なクワガタモドキに放った。

「っ!？」

クワガタモドキに中たった黒い光はデジタルコードになり、クワガタモドキの身体を浸蝕して、データを吸収して私に流れて来る。

オオクワモン

属性…ウィルス

世代…完全体

種族…昆虫型

必殺技…シザーアームズΩ

通常技…破壊の衝動

脳内に情報が流れ込んできた。

そして、ドレインが終わった時、私のレベルが急激に上がっていた。

黒刀ムジナモン（奏）

属性…無し

世代…成長期

種族…タヌキ（人間）

Lv20

HP875

攻480

防480

速135

「ギギギ」

虫食い状態で穴が空いたオオクワモンがいた。

「試して見る」

全力で加速して走り抜き様に高速で斬り裂いて行く。そして、オオクワモンを十二個に分割した。

「十七十分割はまだ無理みたい……………残念……………」

オオクワモンはデジタルコードとなり、私に吸い込まれた。

「はぁ、はぁ……………なんだか痛いし、腕輪も少し赤くなっている……………とりあえず、おいておいて、花でも積んで帰ろう……………」

果実やお魚、花、唐辛子をお兄ちゃんの所に持って帰った。

帰ったのは夜遅くで、洞窟には独特の生臭い匂いが充満していた。

「お帰りムジナ」

「ただいまお兄ちゃん」

ベットにいるお兄ちゃんとヒカリは裸で、ヒカリは気を失っているのか眠っているのかはわからない。

「起きてたんだ……………」

「可愛い妹が帰って来るまでは心配で眠れないよ」

少し嬉しい。

「それに服がボロボロじゃないか……………大丈夫か？」

「お兄ちゃんに慰めて貰えば大丈夫」

「なら、おいで」

「うん……………」

服を脱いでお兄ちゃんとヒカリのいるベットに入って、お兄ちゃんに可愛がって貰った。

そして、私は優しく愛して貰えて、幸せな気持ちになり、腕輪の事を言うのを忘れてしまった。

S i d e O u t

原作開始（後書き）

データドレインはどっとはっくのアレです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4496ba/>

義妹と忠犬引き連れて転生したので、好き勝手に楽しむ！

2012年1月13日16時39分発行